

# 大学出版

No.

2007.5

71

春

大学と社会を結ぶ知のネットワーク

特集

## ナチュラリストの時間

自然史博物館の誘惑 \* 渡辺 政隆 — 2

ナチュラリストの動向 \* 佐々木 猛智 — 7

八重山春の三大稀種カミキリ採集記 \* 栗原 隆 — 12

ハゼの冒険 \* 渋谷 浩一 — 16

ブックレット『ナチュラリストの時間』目次案内 — 21

●連載

ぎょう 行の建築 — 三徳山三仏寺奥の院・蔵王堂(投入堂) \* 松崎 照明 — 表2

大学出版部ニュース — 22

THE ASSOCIATION OF JAPANESE UNIVERSITY PRESSES

有限責任中間法人大学出版部協会



# 行ぎょうの建築

——三徳山三仏寺奥の院・蔵ぞう王堂なげいれ（投入堂）——

松崎照明

（建築意匠）

山海で修行する修験道の最高の行は捨身行しんじんぎょうであるといふ。「捨身」とは、文字通り断崖絶壁から身を捨てて投じて死ぬことである。修験者は母なる自然の胎内に入り、難行苦行を行い、神仏の験しんを得て、生まれかわる。今も続けられる苦行の一つ大峰山の「覗のぞきの行」は、断崖絶壁から全身を逆さまに吊り下げられるが、死ぬことはない。しかし、その行の果てには捨身があった。慶長年間の耶蘇会士日本通信には、断崖上の鉄はかりの秤はかりから行者は谷底に突き落とされ、体は砕け散るとあり、明治時代、最後の修験者と言われた林実利は、那智の滝上から結跏趺坐けっかふざで滑るように滝に入り、捨身によって命を絶った。

鳥取県三朝の山中にある三仏寺は、修験行場と建物の最も古い形を残す修験の寺である。本堂裏の宿入橋やどいりを渡ってこの世に別れを告げ、かずらの根を這い登り、垂直な岩壁を鎖に縋り付き、疲労と恐怖で、全ての感覚が研ぎ澄まされた、そ



大峰山「覗きの行」



三徳山三仏寺・本尊蔵王権現

の先の断崖絶壁に、投入堂が姿を現す。

投入堂は懸造かくだうの最古の遺構で、本尊胎内文書の年記仁安三年（一一六八）以前、部材の年輪による用材伐採の推定年代から十一世紀後半から十二世紀にかけて建立されたと考えられる。

全体を左右非対称に造るにもかわららず、長短十六本の柱と共に、完璧な均衡と統一を持ち、自然に溶け込むように見せながら埋没せず、片足立ちの本尊、蔵王権現ざおうこんげんのように屹立するその姿は、山岳信仰建築の白眉であるのみならず、日本文化が創り出した最高の意匠と言えよう。

堂に上るには、直下の岩壁を岩にしがみついて右回りに行道し、付属する愛染堂との間を抜け、後ろから縁に出る。前方の眺望に息をのみ、宙に浮かぶ縁から覗く深い谷は、死を感じさせずにはおかない。投入堂の呼び名は、修験道の開祖・役小角えのさづぬが空から材料を投入して造ったためと伝えられるが、投入したのは材料ではなく、行者自身そのものではなかったかと思わせる。

修験行の極致を造形化することに成功し、八百年以上も建ち続ける奇跡的な建物がここにある。



国宝・三徳山三仏寺奥の院・蔵王堂（投入堂）

奥に付属するのが愛染堂。建物は北向きに縁に経机が置かれている。

## 特集

# ナチュラルヒストリーの時間

本特集は、ブックフェア「ナチュラルヒストリーの時間」開催（詳細一頁参照）とブックレット『ナチュラルヒストリーの時間』刊行（詳細二頁参照）に合わせて編集されたものである。さまざまな角度から展開される本特集により自然史の魅力を味わったあとは、是非ともブックフェアとブックレットの世界に足を踏み入れていただきたい。

# 自然史博物館の誘惑

渡辺 政隆 (サイエンスライター)

多くの自然史博物館開眼は遅かった。その種の博物館のない大都市で育ったことが最大の原因だが、出遅れを取り戻すべく、今や、旅先では必ず自然史博物館をチェックする立派な自然史博物館フリークである。自然史博物館の魅力は、古さと新しさが混在していることで、そこに自分なりの思い入れも入り込む。多くの場合の思い入れは、博物館にまつわる自然史学者であることが多い。本稿では、象徴的な自然史博物館とも言える英米仏の三大自然史博物館に対する個人的な思い入れを語りたい。

## アメリカ自然史博物館

そもそも、自然史博物館に深い思い入れをもつようになったきっかけは、かのステイヴン・ジェイ・ゴールドだった。いや、彼に案内してもらったわけではない。『ナチュラール・ヒストリー』という月刊誌に連載されている彼のエッセイをいち早く読みたいばかりに、その発行母体であ

るアメリカ自然史博物館友の会会員になったのだ。

当のゴールドは、幼い頃に父親に伴われて初めてこの館を訪れた際に、恐竜展示ホールで恐竜の咆吼に遭遇し、以来、足繁く通い続けたとか。むろん、本物の咆吼であるはずはない。見知らぬ大人のくしゃみがホール中に響き渡ったのだ。いささか脚色されていなくもないが、ニューヨークっ子ならではのぜいたくな体験である。ゴールドは後にコロンビア大学の大学院に在籍しながらこの博物館で博士論文をまとめた。

友の会会員の特権は、雑誌が送られてくることを除けば、入館料無料など、博物館のあるニューヨークに住んでいなければ享受できない恩恵ばかりである。したがって生まれ初めて初めてマンハッタンに上陸したときは、何はさておき、セントラルパークに隣接したアメリカ自然史博物館に勇躍乗り込んだ。

アメリカ自然史博物館の売りは、なんといつてもジオラ



アメリカ自然史博物館の古生物学研究室からセントラルパークと博物館の正面入り口を望む。

マである。まるで箱庭のような立体展示は、剝製をただ並べただけの展示とはちがう臨場感を醸し出している。これはただものではない。剝製のポーズ、環境の選択、背景画の制作など、一つの芸術作品といっても過言ではないだろう。実際、背景画は画家がモデルとなる現地に取材しスケッチした風景を基に描かれたものらしい。

アメリカ自然史博物館はジオラマだけでも必見の価値があるが、荘厳な歴史的建造物の中をさまよいながら、思わぬ展示物や著名な科学者や哲学者の銘文に出会う楽しみも捨てがたい。館内が迷路のように入り組んでいるせいで、

印象的な銘文との再会が思うように果たせないこともまた一興である。アメリカ自然史博物館の歴代館長のなかでもびかいちは、古生物学者のH・F・オズボーンである。特にゾウの進化の研究で有名で、おまけに、英国留学時代にはトマス・ハクスリーの教えを受け、ダーウイ

ンとも知己を得ていた。

この博物館にまつわる現在の最大の話題といえば、映画「ナイトミュージアム」だろう。さっそくぼくも見たが、少なくとも建物正面は本物の博物館が使われているし、名物のジオラマもうまく活かされている。誰もが楽しめるエンターテイメントであり、博物館通ならば百倍楽しい。だいいち、「歴史を息づかせる場所」それが博物館だという台詞がいいじゃないか。

映画にはロビン・ウィリアムズ扮するセオドア・ルーズベルトが登場するが、この第二六代アメリカ大統領は、アメリカ自然史博物館と深いつながりがある。映画のように蠟人形は展示されていないが、館内にはルーズベルト記念ホールがある。テディベアの名称がルーズベルトに由来することでも有名なように、彼は狩猟が趣味で、国立公園制度の創立者でもあり、自然史博物館の後援者でもあった。

この映画の原題は *A Night at the Museum* つまり「博物館での一夜」だが、アメリカ自然史博物館は同じ名称を冠したイベント「博物館お泊まり体験」を実施している。子供たちが寝袋を持参して展示フロアで一夜を過ごすのだ。日本の水族館などでもその種のイベントが実施されているが、子供時代にこのような体験をすれば、長じてから自然史博物館の熱心な応援団になることはまちがいない。アメリカ自然史博物館が舞台になった映画でもう一つ記憶に残るのは、まだ若かったトム・ハンクスが主演した「ス

「ブラッッシュ」である。いふなれば人魚姫マンハッタン版だが、トム・ハンクスが博物館だか水族館のキュレーターで、アメリカ自然史博物館が重要な舞台となっていたと記憶する。トム・ハンクスは別だが、映画に登場するキュレーターは、概してなぜか怪しいオタクが多い。たしか「羊たちの沈黙」にはスミソニアン協会の国立自然史博物館とおぼしき博物館のオタク昆虫学者が登場していた。

## 大英自然史博物館

ロンドンの大英自然史博物館はロマネスク調石造りの美しい壮大な建物である。英名はNatural History Museum, Londonだが、歴史的に見ると大英博物館の自然史標本を収蔵展示する分館として設立されたという経緯があるため、ほくはこの、「大英」という言葉にこだわりたい気がしている。

この建物の外壁には、さまざまな動物のテラコッタ像があしらわれている。正面玄関ホール突き当たりの階段の上からは、この博物館の設立者で、一九世紀の偉大な自然史学者リチャード・オーエン像が見下ろしている。ダイナソアすなわち恐竜という言葉を創造したオーエンは、同時代のもう一人の偉大な自然史学者チャールズ・ダーウインの宿敵でもあった。ダーウインは、ビーグル号の航海で発掘した巨大な化石をオーエンに託し、オーエンはその研究で学会の絶賛を博した。しかし、ダーウインとオーエンとの

蜜月時代はそれで終わる。後にオーエンは、ダーウインの進化理論を攻撃する保守派の後ろ盾となったからだ。

オーエンの牙城である大英自然史博物館にはダーウイン像もある。しかしまさかオーエン像と並べて建てるわけにもいかず、ダーウイン像はカフェテリアの一面に、ダーウインのブルドッグ（番犬）とも呼ばれた盟友トマス・ハクスリー像と仲良く並んでいる。

大英自然史博物館は、数年前から大改修工事中である。

古い建物はアスベスト除去工事に伴う改修をし、それとは別にダーウインセンターという斬新な研究棟を増築中なのだ。二〇〇二年一〇月に完成したダーウインセンター、フエイズ1は、いふなればガラス張りの研究棟で、無脊椎動物と魚類を中心に、ずらりと並んだ液浸標本をガラス越しに見ることができる（ただし現在はフエイズ2の増築に伴い観覧中止）。それと同時にバックヤードツアー（予約制）も実施されていて、一般来館者立ち入り禁止の収蔵庫で、巨大なダイオウイカの標本や、ダーウインがビーグル号の航海で採集した魚類標本などを見学できる。

大英自然史博物館の中でほくがとりわけ好きな場所は、正面入り口から右に折れた通路の壁面である。そこにはジュラ紀と白亜紀の海生爬虫類の化石が埋め込まれている。文才長けた古生物学者リチャード・フォーティはその一面を、「英国自然史博物館の展示室には、イクチオサウルス（それとプレシオサウルス）のまさしく群れが鎮座している。



大英自然史博物館のカフェテリアに並ぶダーウィン像(右)とハクスリー像

化石を含む石版が、一九二〇年代に製作された展示ケースのなかに、床から天井まで飾られているのだ。……しばし立ちどまって見学の児童の群れをやりすごせば、ジュラ紀の海に浮いている自分の横を、海生爬虫類の群れが波しぶきをあげて泳ぎすぎ、潜行に移る光景を脳裏に浮かべられるだろう」(『生命40億年全史』より)と描写している。

大英自然史博物館には分館がある。ロンドンから列車で一時間ほどの町トリングにあるロスチャイルド動物学博物館である。もともとここは、英仏の財閥として有名なロスチャイルド一族の一人ウォルター・ロスチャイルド(一八

六八〜一九三七)ま

たの名を第二代ロスチャイルド男爵の私設博物館だった。ヴィクトリア朝の美しい木製キャビネットに多種多様な動物の剥製がぎっしり並んでいる様は、まさに圧巻である。

ウォルターは、幼いときから動物標本の収集を始めただけでなく、敷地内でシ

マウマやエミュ、ヒクイドリ、ガラパゴスゾウガメなどを飼っていた。シマウマに馬車をひかせたり、ゾウガメにまたがっている写真はけっこう有名である。博物館にも、シマウマを始めとして彼が飼育していた動物の剥製がたくさん展示されている。

ただし残念ながら、ロスチャイルド動物学博物館はこの三月から、大英自然史博物館トリング館に名称が変更されてしまった。ロスチャイルドの名が消えたのは、なんともし寂しい。

### フランス国立自然史博物館

フランスの自然史学といえば、ビュフォン(一七〇七〜一七八)、ラマルク(一七四四〜一八二九)、キュヴィエ(一七六九〜一八三二)など、錚々たる名が浮かぶ。彼らが研究室を構えていたのが、パリ植物園内にある国立自然史博物館である。この博物館でいけば有名なのは、「進化のグランドギャラリー」と呼ばれるメイン展示館である。そのほか、植物園内には昆虫館、鉱物館、古生物学・比較解剖学館などがあり、とても一日では見終わらない。

グランドギャラリーは、エッフェル塔と同じ一八八九年に建てられた建物で、五五×二五メートル、高さ三〇メートルという巨大な吹き抜けの箱である。一九九四年にリニューアルオープンしたこのギャラリーの目玉は、アフリカの哺乳類が隊列をなして歩く光景が剥製で再現された展示



フランス国立自然史博物館の古生物学・比較解剖学館の骨格標本群

だろう。そのほか、二階部分と三階部分にあたるバルコニーにも、進化をめぐるさまざまな展示がある。

たいていの見学者はグラントギャラリーだけを見て満足するかもしれない。しかしほくのお薦めは、古生物学・比較解剖学館である。グラントギャラリーをぐっと小ぶりにしたこの博物館に一步入ると、骨のオンパレードに度肝を抜かされる。しかしこここそが、キュヴィエが創始した比較解剖学の総本山なのだ。キュヴィエは、一片の骨があれば動物を丸ごと復元して見せると豪語した。動物の器官は他の器官と調和しており、種類ごとに固有の普遍的特徴を

そなえている。したがって一個の骨を見れば全体がわかると言い放ったのだ。

展示されている骨格標本のラベルを見ると、キュヴィエの名も見つかる。ここに並んでいるのは、キュヴィエが実際に手に取って調べ、組み立てた標本群だ。つまり、展示ホルの

隅には、ヒトの赤ん坊らしき奇妙な骨格標本も並んでいる。そのラベルには、なんと、ジョフロア・サンティレルとあるではないか。ジョフロアは比較解剖学全般のみならず奇形の研究でも知られている。彼が集めた奇形標本の一部が、ここにこうやって今も展示されているのだ。時間が止まっていると言うべきか、あるいは時空の隔たりが一気に消失してしまうと言うべきか、これぞまさに自然史博物館の醍醐味でなくてはなだらう。

自然史博物館に対してほくが勝手に抱く幻想と、教育施設としての整備された自然史博物館の現状とのあいだには、必ずしも相容れないものがある。標本が整然と整理された博物館が、時空の狭間に存在するボルヘスの空間であるはずもないからだ。しかし、博物館を訪れた記憶は、時間がたつうちに都合のよい思い出だけが生き残り、かつまた増幅されることで自分好みの博物館像を膨れ上がらせていく。そんな夢想を保証するのは、展示室の裏の収蔵庫に時間を止めたまま横たわっているに違いない莫大な数の標本群の存在である。

とにかく標本を集め収蔵すること。自然史博物館にとつて第一義のこの使命が、日本ではなかなか実行されにくい状況がある。自然史学の興隆を招くには、まずなによりも自然史学ファンを増やすことだらう。そのために何ができるか、具体的な策を考えていきたいものだ。



# ナチュラルヒストリーの動向

佐々木 猛智 (東京大学総合研究博物館)

## ナチュラルヒストリーという学問

ナチュラルヒストリーという言葉は説明が難しい。漢字で書けば「自然史」。なぜ歴史の史なのか。これを「自然の歴史」と訳してしまったのでは、地学と古生物学だけの話になってしまう。

ところが、この場合の history は「歴史」ではなく、記述することであるという。そこで、大きな辞書の history の項目を開くと、「体系的な記述をすること」という訳がのっている。

さらに history の語源を辿っていくと、もともとは「調査で得た知識」という意味がある。歴史も過去の事実をひとつひとつ調べて記述することから始まるわけであるから、歴史も記述から出発している。

ナチュラルヒストリーとは「自然記述学」、つまり自然を科学的に記述する学問、あるいは自然の記述法を研究す

る学問、と理解すればよいであろう。

だから自然史と書かずにストレートにナチュラルヒストリーと書いた方が、むしろ誤解がないかもしれない。どうしても漢字で書きたいのであれば「自然誌」と書いた方がよいという意見もある。しかしこれもまた普通の人々には理解できない言葉である。そのためであろうか、自然史博物館というのはあるが自然誌博物館というのは見たことがない。

## ナチュラルヒストリーのこれまで

ナチュラルヒストリーという言葉は、著者が研究をはじめた一九九〇年代前半には存在感がなかった。なぜなら、大学の科目にもナチュラルヒストリーというものはないし、ナチュラルヒストリーのまとまった団体も見あたらないのである(いまでは自然史学会連合という大きな組織がある)。

さらに困ったのは、ナチュラルヒストリーという言葉の意味が全然理解できなかったことだ。どこにも説明がないのである。なぜ自然博物館ではなく、自然史博物館なのか。私の指導教官は確かにナチュラルヒストリーの研究をしていたのだから、「自然史とは何か」という説明は一度も聞かないまま卒業してしまった。

そのようなわけで、博物館に就職してしばらく経つまでその意味を理解できなかった。ナチュラルヒストリーを研究している私ですらそのような状況であるから、他の人々も似たような状況ではないか。だとするとナチュラルヒストリーの存在は一般の人々には正しく理解されていなかった、あるいは現在でも理解されていない可能性がある。

### 最近のナチュラルヒストリー

一方で、学門の分野では、ナチュラルヒストリーの伝統が確実に存在していたことは疑う余地がない。特に生態学、分類学、地質学などはナチュラルヒストリーの王道である。これらの分野では常にフィールドワークを通じて自然に接し、自然を記述してきた。

例えば、サルの状態を研究する研究者は、サルの生き様を観察するために、生息地に小屋を建てることからはじめた。この話を私は小学生の頃、本で読んで大変感激したものだ。自然を研究するにはそこまでする熱意が重要である。

ところが、学問が進歩するに従って、素朴な観察だけで

は物足りなくなり、高度な技術や理論が必要になってくる。しかし、必要とされる技術や理論のレベルが向上すればするほど、その運用に時間がかかるようになり、フィールドとのかねあいが増しくなってくる。

昨今ではエスカレートした話も多い。例えば、分類学の分野では、DNAの塩基配列以外見向きもしない研究者が存在するという話がある。最近又聞きで聞いた話では、アメリカでかつて分類学の自然的研究を行っていた研究室が、今では「ゲノム工場」と化しているという。サンプルは指導教官が様々な手段を駆使して集めてきて、学生がせっせと塩基配列を読み取る作業だけを行っているらしい。

### 「死物学」の落とし穴

「ゲノム工場」の話聞いて自分もはっとした。最近では、分類学者である自分も形態学や解剖学のデータに熱中するあまり室内にこもりきりである。しかもサンプルは他の誰かから送られてきた固定標本だ。それは大抵、共同研究の一環で、DNAも同位体も既に別の人がデータを出している。

そのような研究に追われていると、フィールドに出る余裕が全然ない。気が付くと固定標本だけを相手にして、研究がいつのまにか「死物学」になってしまっている。これは自然史研究者として問題だ。

実は「死物学」は博物館の研究者が陥りやすい落とし穴

のひとつである。特に、博物館に既に十分な標本がある場合、フィールドを無視しても論文が書けてしまう。万一自分の博物館にはなくても、世界中の博物館から借りてくれればよい。

固定標本に慣れてしまうと、生きた生物は見た目が異なるため違和感を感じる。研究対象が生きていて動き回るとデータもとれないから面倒だ。即座に固定標本にして、それらの生息環境、他の生物との関係などは全く考えずに、固形物の試料として処理してしまう。

これはひとつの極端な例だが、似たような問題をかかえている人は少なくないと思われるのである。

### 環境問題とナチュラルヒストリー

私の周辺では、以前よりはナチュラルヒストリー関連の話題を聞くようになった気がする。いくつか理由があるようだが、ひとつは環境問題が以前よりも深刻になったことをきっかけに、自然環境の重要性が再認識されつつあることが背景にある。

さらに、生物の分野では、外来種がはびこり、多くの稀少生物が絶滅危惧種としてリストされている。外来種は法律でも規制の対象になり、しばしばニュースに登場するようになった。これらの最新動向を知るためには、常に野外に出て、生息状況をチェックしなければならない。これはまさにナチュラルヒストリーである。

生物や環境の保全との関係から、様々な多くの種を扱うことの重要性も再認識されてきた。かつての生物学では、斉一性が生物学の本質であり、個々の生物で異なる現象に注目するなど、些末なこととして蔑視された。分類学はその象徴だ。A種とB種は棘の数がC本異なる。そんなことはどうでもよいではないかと盛んに言われたものだ。

しかし、今では多様な自然を記述することを無視できなくなっているのである。これは21世紀に入ってからからの明らかな変化である。

### 研究の現場における実感

一方で、ナチュラルヒストリーには逆風が吹いているらしい。特にフィールドワークの現場ではそれが深刻であるという。学生が野外に出なくなった、つまりインドア志向で線が細くなっているというのである。

私がかつて地質学教室で聞いた話では、卒論で年間一〇〇日山を歩いて地質図をかかなければ許されなかった程度であったという。それだけ時間をかけて自然を学んだのである。

ところが、既に私が学生の頃には、ほんの数日間の地質調査実習におつきあいするだけで単位が取れたし、さらに最近では、山をほつき歩いている暇があれば投稿論文を書きなさいと言われかねない状況である。私の指導教官の世代から見れば憂慮すべき事態であろう。

しかし、この手の話は「今の若い者は」という小言に類

するものかもしれない。最近の学生は骨太ですばらしいという批評は一度も聞いたことがないのだが、私の世代にも、私より若い世代にも頑張っている人は確実にいるのである。

むしろ全員にフィールドワークを期待するのはおかしいのではないか。普通の人は普通に暮らして、自然史を極めたい人は狂ったようにフィールドを歩き、自然を楽しみたい人は楽しみながら歩けばよい。万人に一樣にナチュラルヒストリーを求めるのは無理である。

本場の問題は、ナチュラルヒストリーの道を目指す人が修行できる場が、昔より限られてきているように見えることだ。本場に研究したい人が本場に研究できる場を常に確保し、その道が途絶えることがないようにすることが大切である。

### ナチュラルヒストリーの論文

いつの時代にも自分以外の専門分野を非難する者は存在する。例えば、自然史分野の周辺では、「ナチュラルヒストリーは博物学でサンエンスではない」とか、「ナチュラルヒストリーは大昔からある、だからもう古い」などという批判である。この場合、自分の分野は新しいとか、科学の程度が高いとアピールしたいのである。

長い歴史を重視するナチュラルヒストリーの立場からすれば、そのような主張は大丈夫かと心配になる。今新しいというのは、そのうちに新しくなくなる、ことを意味する。

だからまたすぐ次の新しいことを探し続けなければならぬ。

ナチュラルヒストリーの分野では、五〇年経っても一〇〇年経っても引用され続けるような著作が存在する。それは大抵、研究者が長期のフィールドワークや標本観察をもとに一生を賭けて書いたような大論文である。そのような著作を目指すことがナチュラルヒストリーの醍醐味であり、私もそのような畢生の大作を完成することを目指して、フィールドを歩き続けているのである。

ところが、分野によっては五年前の論文はもう古いから読まない、という。私はそれを聞いて本場に驚いてしまった。五年経っただけで読まれなくなるような論文を書くために研究するとは、空しくないのだろうか。もし全ての論文が五年後に読まれないとすると、研究者の人生はおよそ四〇年間であるから、一定のペースで出版すれば、定年前には全著作の九割弱が誰も読まない論文になってしまう。これは大変なことである。

### ナチュラルヒストリー研究は容易ではないが不滅である

ナチュラルヒストリーの対象は自然物全て、すなわち動物、植物、鉱物である。これらをすべて観察し、網羅することは容易なことではない。学問の細分化が指摘されて久しいが、ナチュラルヒストリーはとっくの昔に細分化している。それだけ幅広い学問分野であり、一人の手に負える

ものではない。

自然に接しながら自然の真の姿を理解することを目指すナチュラルヒストリーの研究は、長い年月を要するために、心に余裕がなければ実践できない。この点が心配なところである。最近では、研究業績の点数付けがやかましい。脳味噌がインパクトファクターの計算で多忙を極めている状況下では、どうしても余裕がなくなってしまうからである。

室内で論文を効率よく書くことに専念して自然を無視する方が楽であるから、人々はその方向に流れやすい。一度そうなると、外に出てフィールドを見てこいと言われても困るのである。

真のナチュラルヒストリー研究者はフィールドも論文もどちらもこなさなければならぬのであるから、インドア派の研究者よりも大変である。論文を量産して、さらに自然を楽しむ力量を持つ人だけが、ナチュラルヒストリーの研究者として生き残っていける時代になり、今後もその傾向が強まるのかも知れない。そう考えると、ナチュラルヒストリーの研究をすることは容易ではないのである。

しかしナチュラルヒストリーは不滅である。自然が存在する限り、それを研究するという学問は必要である。人間は自然を無視して生きていくことはできない。人類は自然を否定し破壊しながら自分の幸福を追求し、その結果やはり自然を無視できないことを知る。学問の世界でも似たような道は避けられないのかも知れない。

### ブックフェア「ナチュラルヒストリーの時間」ご案内

大学出版部協会では、自然史の愉しみ、自然科学書の魅力に触れていただくブックフェア「ナチュラルヒストリーの時間」を六月以降、順次開催いたします。自然と人間の共生が唱えられている現在、豊穣な自然史の世界に足を踏み入れてみませんか？

また、フェアに合わせ、自然史の掘がりと奥行きをコンパクトに、そして分かりやすくお伝えするブックレット『ナチュラルヒストリーの時間』（大学出版部協会編、定価一六八〇円、六月刊）を刊行いたします（本誌二一頁参照）。

ブックフェア開催予定店舗は、以下の通りです（今後、開催店舗が追加される場合もございます）。開催時期など詳細は、各店舗または大学出版部協会事務局（東京都文京区湯島二一四一一、電話〇三―三八三四―六六八六）にお問い合わせください。

- ジュンク堂書店（仙台店／仙台ロフト店／大宮ロフト店／池袋本店／新宿店／名古屋店／京都店／京都BAL店／梅田店／大阪本店／西宮店／三宮駅前店／三宮店／明石店／広島店／福岡店／鹿児島店）

- 紀伊國屋書店札幌本店

# 八重山春の三大稀種カミキリ採集記

栗原 隆 (愛媛大学)

私はじめて八重山に渡ったのは、今から一八年前の春のことであった。そのころは蝶々の好きだった父に連れられて、わずか五日の行程で与那国島と石垣島に訪れた。東京では桜もまだ蕾だというのに、八重山ではオオゴマダラやリュウキユウアサギマダラ、アゲハチョウ類などが飛び回っていた。とても日本とは思えない光景に、小学生であった私は強い衝撃を受けたことを今でも覚えてい

る。私が虫採りをするようになったきっかけは、偶然、生まれてきたところの父親がいわゆる昆虫愛好家であったからである。物心つく前から、私の意志とは関係なく野山に連れられ、知らない間に昆虫採集が生活の一部になっていた。父の周りには多くの蝶愛好家があり、世の人々は皆、虫を採って遊んでいるような錯覚さえ覚えた。しかし、小学校に入ってから数年後の二学期に一つの事件が起きた。虫ばかり採りに行っていた夏休みが終わり、私はどの学校にでもある自由研究の課題として、昆虫標本を学校に持っていつ

た。ところが、それを見た先生は、「生き物の命は大切にしなければならぬ、だから虫を殺すことはいけぬことだ」と私に説教をはじめた。世の中では、家に入り込んだゴキブリや血を吸う蚊をみんな殺しているではないか。私は子供ながらに納得がいかず、そのころから学校の先生にはどこか、不信感を抱くようになった。しかし、先生に反抗する勇氣もなく、結局、別の課題をやらされてしまった。そんな事があつた後、私は八重山デビューをしたわけである。当然、先生にいわれたからって納得できなければ従わない、今思うと扱い難い生徒だったに違いない。

最初の八重山では、私は必死に蝶を追いかけていた。やはり、見るものほほすべてが、はじめての蝶である。内地では甲虫も集めはじめていたが、図鑑でしか見たことのない憧れの蝶が目の前を飛んでいるのに、それを追いかけていられるだろうか？ そんななか、石垣島のオモト岳の麓をはしる林道で、内地でよく見る赤いハナカミキリがふ



相良川の清流

わふわと飛んでいた。このころから、リンゴカミキリのよ  
うな飛んでいる甲虫を採ることは大好きだったので、捕虫  
網で採集した。しかし、小学生の私にはやはり、内地で最  
普通種のアカハナカミキリにしか見えない。私はとっさに、  
「バカハナって沖繩にもいるんだ、こんなのいらないうね」  
と逃がそうとした。しかし、父は「せっかくだから採って  
おいたら」と今となつては神様のような一言をいった。  
カミキリの愛好家であればお気付きであろうが、このバカ  
ハナと私によられた種こそ、その当時、八重山の春のカミ  
キリ三大稀種とうたわれたヤエヤマヒオドシハナカミキリ

であつた。現金なも  
ので、珍しいとわか  
ると興味がでるもの  
である。このときか  
ら、私はカミキリ採  
集に目覚め、残る二  
稀種であるムネモン  
ウスアオカミキリと  
マツダクスベニカミ  
キリを採ることを夢  
見て八重山に通うよ  
うになった。  
八重山諸島は石垣  
島のおモト岳（五二

六メートル）が最高地点で、そのほとんどが亜熱帯気候に  
属しており、森はスタジイやタブノキ類などの照葉樹主体  
で構成されている。この地域のカミキリムシ科に属する種  
は、現在まで、一二〇種弱が記録されている。その多くの  
種は三月から発生がはじまり、梅雨が明けると大部分は見  
られなくなる。八重山のカミキリは、多くの種類が関東地  
方では見るのできない南方系の種類で、最初のころは  
何を採っても真新しい、まさに楽園のようであつた。枯葉  
を叩けば、茶色いカミキリたちが叩き網の上に降り注ぎ、  
我先にと走って逃げる姿をよく目にしたものだ。

八重山に通うようになって四年たつた一九九二年の春、  
私はとうとうマツダクスベニカミキリと出合った。この年  
は、オモト林道のヤンバルアワブキが良く花をつけている  
年で、いくらか咲いている木も見られた。輝く宝石・オオ  
ヒゲブトハナムグリでもないかと思つてみるが、掬つて  
もオキナワコアオハナムグリやヨナグニヒラタハナムグリ  
しか入らなかつた。諦めかけながらも、一本のヤンバルア  
ワブキを見上げていると、なにやら赤い虫が梢付近を飛ん  
でいた。やや斜めに立ったような独特な飛び方はまさに、  
マツダクスベニカミキリであつた。すぐさま八メートルの  
竿で掬うと、あっさり網の中へ入つた。実際に見ると、光  
沢のないぼやつとしたオレンジ色をしており、正直、あま  
り格好よくない。内地のクスベニカミキリの方が私は好き  
だ。そんな罰当たりなことを考えていたからか、その後、

本種を目撃する機会はなかった。その日の午後は、川平在住の深石氏のもとへ行った。ちょうど彼は、オオヒゲブトハナムグリの生態観察のために、裏山のヤンバルアワブキに観察用の足場を組んでいた。そこに案内していただいたのだが、目的地へは道もろくになく、いかにもヒルやヘビが出てきそうな湿った林内をただひたすら彼について歩くしかなかった。まだ、サキシマハブと雖も怖い年頃である。私には長い時間を感じた行程を過ぎ、林の中の小さな空間に出た。早速、観察用の足場まで登っていくと、花に止まっているオオヒゲブトハナムグリを見ることができた。まさに緑や赤の寶石が白い花に添えられたような錯覚に陥る美しさであった。

翌年の一九九三年は、はじめて一人で与那国島へと渡った。とはいっても、数日後には父と与那国島で合流する予定であったが。このとき、私は中学三年で、まだ、原付を運転することはできず、島を自転車でもまわったの採集となつた。祖内を拠点とし、桃原や比川、久部良岳などを目指すが、とにかくこの島は坂だらけである。最近のドラマで主人公の医者が自転車で往診をしていたが、実際に診療所から久部良を往復するだけでも大変である。私は炎天下の中、必死の形相で自転車を走らせていたに違いない。このときは何を採ったかすら覚えていない。父と合流後は、西表、石垣とまわり、最後にはじめて宮古島に寄った。今回はわずか半日の採集であったが、熱帯植物園のタブを探せ

ばミヤコリンゴカミキリがいるとの情報をもとに、早速向かった。はじめは園内の尾根道に向かつて歩き、歩道沿いのタブを見てまわると、ふわふわと独特の飛び方をする虫が目に入った。探ってみるともちろん、ミヤコリンゴカミキリで、タブの新葉の主葉脈には独特の加害痕が多数見られた。慣れると本種がいかに個体数の多い種類かがよくわかる。やはり、飛んでいるカミキリを採るのはおもしろく、あつという間にタイムリミットとなつた。

一九九四年は私にとつて厄年となつた。昨年同様、まず私は一人で与那国島へ入り、取立ての免許を使つてはじめて原付で島をまわつた。与那国はもう六回目であり、数日間、いつも採集してまわるポイントを転々としながらチョウ、ヨナグニジュウジクロカミキリやドウボンカミキリ類などを採集してまわつた。そして、その日がやって来た。今回は石垣島で家族と合流する予定になつていたが、頭がくらくらして起きられない。それでも何とか空港まで行き、意識を失いかげながら石垣のなぎさ荘へようやく着いた。熱は三九度をまわつていて、とりあえず宿の女将さんに介護されて翌日、家族と合流した。私はそのまま病院に連れて行かれ、ウイルス性の風邪と診断された。そんななか、ホテルに移された私をよそに、父は一人で採集に出かけていった。今回は母と妹も来ていたが、それにしても病床に伏せる息子を置いて採集に出かける父とは……。私は虫屋の恐ろしさを知つた気がした瞬間であつた。結局、その後





オモト岳より底原ダムを望む

三日間何もできなかったが、最終日に執念で日の出前にオモト岳登山道の有名なヤンバルアワブキに向かい、昼まで樹上で粘るがマツダクスベニカミキリとオオヒゲブトハナムグリを少し採集したに止まり、下の方にいた大学生はムネモンウシアオカミキリを二頭採集していた。あこがれの虫が足元にいたという悔しさを抱き、私は山を下りた。

その悔しい思い出が晴らされることになったのは、五年後の一九九九年であった。まさに、それは突然やって来たといっても過言ではなかった。この年は、川平の深石氏宅へ居候させて頂き、三月三日～四月五日まで一カ月余り、

石垣島を中心に採集を行った。さすがに

三月上旬では、カミキリの発生もまだ早く、ピーティングやスウィープをしても一年中見られる種類やアメイロカミキリがポツポツ落ちる程度である。それならと、三月一〇日に材採集を目的に小雨の振る中、オモト岳の山頂まで登った。雨

もひどくなり、山頂とNHKの铁塔へ向かう分かれ道を鉄塔側に少し進んだ先の窪地で雨宿りをしていると、見たこともないホタルがシダの上に止まっているのを目撃した。深石氏はホタルについて豊富な知識をお持ちで、採集した個体を早速、見ていただいたところ、ムネグロボタルという非常に珍しい種類であることがわかった。ほかに、オモト林道でタブのスウィープによりイシガキトサカシバナムシ、海岸ではキタヤマホソケシマガゴソコガネなど、興味深い甲虫類を得ることができた。そして、今回の旅行も終盤に入った三月二十九日、運命の日が訪れた。この旅行で何度目になるか、通い慣れたオモト岳の登山道を歩いていき、いつものようにヤンバルアワブキを見ながら登っていく。途中、山頂まで四〇分の看板のかかったアワブキを見上げると、なにやら葉の裏に静止していたカミキリのシルエットを見つけた。今まで通り、イワサキキンスジカミキリだろうと網を伸ばして掬い、中を覗き込むと……。青と表現するべきか？ 独特の美しい色をしたムネモンウシアオカミキリが目飛び込んだ。自然と出るガッツポーズ。足掛け一一年目にして、八重山春の三大稀種を自分のこの手で採った感動は、その後の私の人生を方向付けるきっかけになった。もう、四年も八重山から遠ざかっているが、春になるといつも懐かしい思い出と行きたいという衝動が、私の心に湧き出るのはいうまでもない。

# ハゼの冒険

渋川 浩一 (国立科学博物館)

## はじめに

日本はハゼ大国である。ハゼ好きや研究者にとつては天国ともいえるだろう。

なにしろまず種類が多い。この原稿を書いている二〇〇七年三月末時点で、日本から正式な記録のあるハゼは四五二種にのぼる。日本産魚類全体でも四〇〇六種だから、この国では魚の一〇にひとつ以上がハゼ、ということになる。しかもハゼはどこにでもいる。北は北海道から南は沖縄まで、河川の上流から河口域、湖沼、運河や用水路、地下水脈、沿岸の干潟や岩礁域、砂浜海岸、転石帯、サンゴ礁、マングローブ域、内湾、さらには水深四〇〇メートルの深海にいたるまで——日本全国ハゼだらけといっても過言ではない。

見られる面々がまた多彩だ。現在一三〜一四の科グループ(科や亜科)にまとめられることの多いハゼだが、一国

内で全グループのメンバーが見られるのは、世界広しといえど日本と中国くらいのものである。

ドンコ科など東〜東南アジアの大陸部を中心とした地域にしか見られないグループが生息すること、西部太平洋というハゼ種多様性の著しく豊かな地域に位置すること、国土が南北に長く、亜寒帯から亜熱帯まで幅広い気候帯をカバーしていること、きわめて豊かな陸水や海洋環境をもつことと様々な好条件が、日本をハゼ大国たらしめている。

## 日本にハゼを求めて

日本の魚類相の豊かさは世界的にも有名で、古くから多くの先達による調査研究が広範かつ詳細に行われてきた。ハゼが豊富に産することも、すでに言いつくされた感がある。それでもさすがにここまでハゼ相が豊かであることがわかったのは比較的最近のことだ。

日本のハゼを学名とともに初めて紹介したのは、オラン



まだ名前のない新種ハゼ① (奄美大島産)

ダの医師であり、当時有名な生物学者でもあったハウトインである。一七八二年というから、ときは鎖国体制真っ只中のこと。彼は、出島に駐留していたスウェーデン人医師ツウンベリーから送られた標本をもとに、“*Gobius Niger*”というハゼ一種を含む合計三六種（うち二三種は新種）の海産魚を発表した。ツウンベリーといえは植物学の業績で有名な人物だが、後には日本産魚類に関する論文も自身いくつか著している。その彼がなぜ貴重な標本をわざわざ先にハウトインに送ったのだろうか。ハウトインが彼の日本行きを推薦してくれたひとりであったためではないかと推察する人もいる。なんにせよ、ハウト

インはこうして日本産魚類研究の先駆けという荣誉に浴することになった。ただし、彼によるこのハゼの同定は誤りである。真の *Gobius niger* はもともとリンネにより記載されたものだが、これは地中海や黒海、大西洋東部に生息するハゼであり、日本にはいない。標本が残っていないため、残念ながらハウトインの“*Gobius Niger*”が何であったのかを特定することは難しい。

日本からハゼの新種が報告されるのは、それから半世紀以上後のこと

になる。一八三三年から一八五〇年にかけて刊行された『Fauna Japonica (日本動物誌)』がその舞台だ。このあまりに有名な著作について、くわしい説明は必要ないだろう。シーボルトとその助手ビュルゲルが日本からオランダ船で持ち帰った膨大な標本をもとに、ライデン博物館の館長テミンクや同館の脊椎動物管理者であったシュレーゲル、同無脊椎動物管理者デ・ハーンが調査研究し、記載を与えた大著である。収録された三五九魚種のうち、ハゼは一一種で、マハゼやハゼクチ、ワラスポ、チチブ、カワアナゴ、ドンコなど八種が新種であった。ハゼクチやワラスポといえば、日本では有明海や八代海でしか見られないハゼである。そして多くない掲載種のなかにそうしたハゼがいるところあたり、長崎(出島)しか外国船の入港が認められず、外国人の国内移動にも厳しい規制がかかっていた時代背景を強くうかがわせる。

その後も、長崎発のハゼ報告はつづく。魚類分類学史上もっとも著名な研究者のひとりブリーカーもまた、そうした日本産ハゼの研究を行ったひとりだ。インドネシアにオランダ軍医師として駐留するかたわら東南アジア産魚類に関するおびただしい数の著作をもにした彼は、日本産魚類についての論文をも数多く発表している。多くはやはり長崎(ときに山口)産標本をもとしたものであったが、一八六〇年の報告では“*Jedo*”(江戸)という採集地名も見受けられる。この江戸産標本は、鎖国政策崩壊前後に来

日し、日本では「近代西洋医学教育の父」として高名なオランダ海軍医ポンペから送られたものであるという。ポンペがどのようなにしてその魚を集めたのかは定かでない。ともあれそうしてブリーカーの手により学名のつけられた日本のハゼは、日本産標本をもとにしたものだけでも、ヒメハゼやスジハゼ、アカハゼ、ヒゲハゼ、エドハゼなど六種にのぼる。

さらに当時、日本の標本を持ち帰っていたのはオランダ船だけではなかった。ロシアや米国による独自の探検調査隊も日本周辺にまで足を伸ばし、入港はかなわなかったにもかかわらず、採集した生物標本をこっそり(?) 自国に持ち帰っている。北海道南部や本州沿岸の潮溜まりに多産するアゴハゼは、そうした標本をもとに新種記載されたもののひとつである。

鎖国が解かれると、それまで長崎周辺にほぼ限定されていた魚類研究の手が他地域にも広がってゆく。明治政府が招聘したいわゆる「お雇い外国人教師」のヒルゲンドルフやデーデルラインは、職務の合間を縫って日本各地で魚を集め、自国に持ち帰って研究をすすめた。ヒルゲンドルフが新種記載したハゼは七種あり、春の風物詩「踊り食い」で有名なシロウオなど五種については今も彼の命名した学名が使用されている。一八七五年には英国の調査船チャレンジャー号が横浜に寄港し、しばらく日本各地で海洋生物調査を行った。この調査で得られた魚類は大英博物館のギ

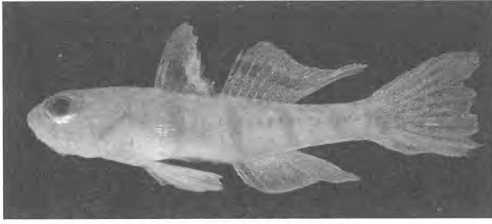
エンテルによってまとめられているが、そこにもやはり日本産ハゼが散見される。

二十世紀初頭、傑出した著名な魚類研究者としてすでに名を馳せていた米国スタンフォード大学教授ジョルダンと彼の弟子たちによる日本の魚類相研究が精力的にすすめられた。そのうちのハゼに関する総合的な報告は、ジョルダンとスナイダーが一九〇一年に著している。彼ら自身が日本各地で採集した標本に加え、東京帝国大学や帝室博物館に所蔵されていた標本、米国の調査船アルバトロス号が収集した標本などを検討し、絵師スタークスによる緻密な点描画とともに二一新種を含む五七種のハゼを紹介したもので、これにより日本、少なくともその温帯域のハゼ相に関してはその大枠が把握できたといえよう。ちなみにジョルダンらが発表した日本産魚類の新種は約七〇〇種にのぼるとされ、一九一三年に出版されたジョルダンと東京帝国大学の田中茂穂、スナイダーの共著による日本産魚類目録には一二三六種が収録されている(そのうちハゼは八二種)。

### 日本人によるハゼ研究

この頃から日本のハゼ研究の主たる担い手は、日本人研究者へとシフトしてゆく。

ハゼの新種を発表した最初の日本人は、さきの目録の事実上の著者だったという田中茂穂である。田中は一七三



まだ名前のない新種ハゼ② (奄美大島産)

種もの新種を発表した当代きつての魚類研究者で、日本のハゼに関しても、一九〇九年に発表したボウズハゼを皮切りに、ホシノハゼやイサザなど合計一〇種を新種記載している。後年、田中はハゼ研究を教え子である富山一郎に託した。日本産ハゼの分類は富山の大学院生時代の研究テーマとなり、一九三六年には道標的論文『Cobriidae of Japan (日本のハゼ科魚類)』を上梓する。富山はこの論文で一属六新種二新型を含む一〇〇種の日本産ハゼについて解説した(台湾産を含む)。指導教官の田中は魚の分類に際し年とともに細分主義者(スプリッター)から非細分主義者(ランバー)へと変化したとされるが、当時はすでに後者の傾向がつよかったという。その影響もあるのだろうか。現在は独立種とみなされているものでも、この富山の論文では同一種内の亜種や型、あるいはそれにも満たない単なる変異として扱われている場合が少なくない。ちなみに富山は、後に現在の天皇陛下のハゼ研究を指導したことでよく知られている。

その後の一九五五年に発行された松原喜代松による不朽の名著

『魚類の形態と検索』では、一四七種の日本産ハゼが掲載された(台湾・朝鮮半島産を含む)。松原の指導で学位を取得した高木和徳も五種のハゼを新種記載している。現在ハゼの同定ツールとして欠かすことのできない頭部感覚器系の情報は、この高木によって有用性が国内で紹介されたものである。

一九七〇年代以降、日本のハゼ研究はまた新たな段階に入る。沖縄の本土復帰、スキューバダイビング技術の向上と普及などがあいまって、沖縄地方を中心とした亜熱帯性魚類の研究が国内の諸研究機関により精力的に進められるようになったのだ。熱帯・亜熱帯域のサンゴ礁やマングローブ域はとび抜けて多様なハゼが見られる環境であり、日本産ハゼの記録数はすさまじいペースで増加していった。そうした研究成果は、『魚類図鑑 南日本の沿岸魚』(益田ほか、一九七五・掲載ハゼは八〇種)、『日本産魚類大図鑑』(益田ほか(編)、一九八四・同、二九二種)、『日本産魚類検索——全種の同定』(中坊(編)、一九九三・同、三四二種)など、相次いで出版される図鑑類に順次反映され、一般にも普及してゆく。二〇〇〇年に刊行された『日本産魚類検索——全種の同定』の第二版には、ハゼ四十一種を含む三八六三種の日本産魚類が掲載された。その後追加された日本産ハゼは四一種、そして総数はついに四五二種にまで達した。

## 新種フツシユはなおつづく

松浦・瀬能(二〇〇四)の集計によれば、日本産魚類の総数が将来的に四四〇〇種を超えるのは確実であるという。これまでに正式に記録されている魚種数が四〇〇六種だから、いまだその一割分にも相当する数の名前のない魚が日本には存在することになる。なかでも突出しているのが、ハゼである。さきの集計では、未記録魚種約四二〇種(新種約三五〇+その他の未記録種約七〇)のうち、ハゼ科だけでも二三〇種あったという。次点のゲンゲ科が一九種であることを見れば、ハゼの極端な突出ぶりが容易にうかがえよう。

昨今ハゼは、*マクロ派*と呼ばれる小型底生生物に魅せられたダイバーの格好の被写体として人気を集めている。ダイビング雑誌では毎号のように美しいハゼ写真が紙面を飾り、ついにはハゼの水中写真だけを扱った図鑑すら書店に並ぶようになった。水中に向けられる目は少し前までとは比べものにならないほど多く、見つかる新顔もいまだとどまることを知らない。そのうえさらに、これまで十分な調査がなされてきたとは言いがたい一〇〇メートル以深の場所にも、思いのほか豊かなハゼ相が見られることが明らかとなりつつある。ミミズハゼ類のように、驚くべき数の未知種の存在が明らかになっているグループもある。生態的あるいは遺伝的調査により、従来一種と考えられて

いたものが複数種に分けられる事例も増えてきた。日本産ハゼの総数が将来どれほどになるのか、いまはまだ予想をつけることさえ難しい。

ハウトインから二二五年、すでに踏破しつくされたように見える日本にも、いまだ数え切れないほど未知のハゼがいる。ハゼ研究者の冒険は、まだまだつづく。

# ナチュラヒストリーの時間

大学出版部協会編 A5判/160頁/定価1680円

自然史へ誘う：博物誌から生態学、多様性生物学、ゲノムサイエンス、そして21世紀のナチュラヒストリーを愉しむ

## I. Prologue of Natural History

- 第1話 自然を記録すること……斎藤靖二  
第2話 自然史と本……青木淳一  
第3話 日本のナチュラヒストリー……岩槻邦男  
コラム① 動物写真の世界

## II. History of Nature

- 第4話 ノーチラス号が遭遇した大ダコ……奥谷喬司  
第5話 マリー・ストープスの2つの顔：日本の植物化石研究事始め……矢島道子  
第6話 京都の語り部：深泥池……竹門康弘  
第7話 遺跡の土に秘められた情報……松井 章  
コラム② ききみみずきん  
第8話 遺体で動物学を埋め尽くす……遠藤秀紀  
第9話 ダーウィンと魚類学：人々と時代と魚たち……武藤文人  
第10話 日本の小鳥飼育文化と鳴き合わせ……小山幸子

## III. Diversity of Nature

- 第11話 サクラソウとマルハナバチ……鷲谷いづみ  
第12話 日本列島に人間と野生動物との共生の歴史をさぐる……湯本貴和  
第13話 琉球列島の自然史……太田英利  
第14話 マンボウと標本……松浦啓一  
第15話 分類学事始め：タクソン、タイプ、名前……馬渡駿輔  
コラム③ サルにノミはいない？ 幻の定説

## IV. Story of Nature

- 第16話 クマ大量出没の謎……大井 徹  
第17話 ふしぎの国のアリ巢……丸山宗利  
第18話 現代によみがえったインカ時代の狩獵……山本紀夫  
第19話 子どもたちと自然教室：干潟で役立つ本や教材……古賀庸憲  
第20話 熱帯雨林の林冠アリ……市岡孝朗  
第21話 殿様の自然史……松岡明子  
第22話 幻の口バと男たち……木村李花子  
第23話 食の博物誌：多民族国家のハイ・ティー……周 達生  
コラム④ アリジゴクの自然史

## V. Epilogue of Natural History

- 第24話 遺伝子を通じた動物との対話……村山美穂  
第25話 ゲノム時代のナチュラヒストリー……西田 睦  
コラム⑤ 小・中学校図書館は今

特別寄稿：「具体的な人間の日常性」と抽象化された「専門性・科学性」……久塚純一  
自然史文献リスト

# 大学出版部ニユース

## 大学出版部協会の出版物

六月に出版される『ナチュラルヒストリーの時間』（A五判、一五六頁、定価一六八〇円）は、大学出版部協会にとつて初めての刊行物である。

内容紹介をオビから頂戴すると、「自然史へ誘ふ、二五話。博物誌から生態学、多様性生物学、ゲノムサイエンス、そして二二世紀のナチュラルヒストリーまでを愉しむ」となる。ゲラを拾い読みした範囲ではないが、ジュール・ベルヌの『海底二万マイル』を下敷きに深海と大ダコを扱った「ノーチラス号が遭遇した大ダコ」（奥谷喬司）は、個人的に妙に納得できて面白かったし、虫好きの少年がそのまま成長して優れた研究者となった「自然史と本」（青木淳一）などは、少し驚きであった。

二五人の執筆者が個々の専門分野の主題にそつて、サイエンスエッセイとして簡潔に纏めた本書は図版も多く、門外漢にとつても「それなりに面白い」読み物となつている。また中学・高校生にとつては環境問題を考えるきっかけともなり

得るものであり、是非ご一読をお薦めしたい。

刊行にあつては国際書籍コード（CIP）を取得し、新参者ではあるが業界デビューを準備中である。しかし協会は取次口座を開設しておらず、販売は直販となるため、読者各位には不便をおかけすることになる。予めご了解を賜わりたい。

## 〇七年度大学出版部協会事業として

〇七年六月から全国のジュンク堂書店でブックフェア「ナチュラルヒストリーの時間」が巡回開催される。このブックフェアは協会編集部会と営業部会の合同企画によつて実現する大学出版部協会の二〇〇七年度事業計画の中枢をなすものであり、販促ツールとして発想されたものが本書『ナチュラルヒストリーの時間』であつたが、三大学出版部の当該分野の専門編集者が企画を練り込んでいるうちに、巻末に協会加盟三〇出版部の関連書籍一覧（自然史文獻リスト）が掲載されるなど、一五六頁のサイエンスエッセイとなつたものである。

## 協会事業としての出版

大学出版部協会の定款三条二項には「書籍の出版と販売」が協会の目的達成のための事業として掲げられている。したがつて書籍の出版は「協会としては目的に沿つたこと」と言えるのであるが、出版母体は協会加盟の三〇大学出版部であり、協会が主体となつて書籍を出版することは、将来展望または事業展望としてはあり得るものの、あまり現実感覚が伴つてはおらず、遠い将来のことと誰しもが思つていたのではないだろうか。

それが今回、編集部会と営業部会の合同企画によつて実現したのである。このことには幾つかの意味合いが含まれる。そしてその意味合いは「大学出版部協会としての出版活動」という一点に収斂する。

しかしながら協会としての出版事業の仕組みはまだ出来ておらず、今後継続的な出版活動もあまり考えられないが、『ナチュラルヒストリーの時間』は、協会活動の今後に一石を投じた事は間違いない。



## 北海道大学出版会

▼佐藤謙著『北海道高山植生誌』(B5判・二一〇〇〇円) 北海道の高山植生を初めて網羅的にまとめたモノグラフ。植物相と群落の両面から分析する植物地理学的研究成果の集大成。多数の常在度表や著者撮影のカラー写真を盛り込み高い資料価値を有する地域植生誌の決定版。▼大場達之・宮田昌彦著『日本海草図譜』(A3判・二五二〇〇円) 日本初の本格的な海草図鑑。日本産五科三〇種をスキヤノグラフィー法によりカラーで紹介。最新の分類学的知見に基づく検索表の他、海草群落の植生体系や人との関わりなど、解説も充実。これまで同定が困難だった海草の全容がこの本で明らかに。▼上田一郎編著『微生物の病原性と植物の防御応答』(B5判・一二六〇〇円) 病原性微生物の攻撃に対する植物の防御応答の分子機構について幅広く解説。耐病性分子育種へ向けた指針として関係者必携。▼吉田武彦訳『リービヒ「化学の農業および生理学への応用」』(A5判・一一五五〇円) 「近代農芸化学の父」リービヒの代表的著作初の邦訳。彼の農業観へ影響を与えたマロンの日本農業の報告も収録。

## 東北大学出版会

▼徳川直人著『G・H・ミードの社会学理論―再帰的な市民実践に向けて―』(A5判、四二二頁、四二〇〇円(税込)) 種々の単純な話が流布する昨今、「声と耳」を豊かに保ち、社会認識につきそう社会学を再構築できないか。古典と現代の間で「私」にできることは何か。本書はミード研究の第一人者が、原典と史料を一層丹念に読み返し、シンボリック相互行為論と読書会の論理との接合をはかった研究書である。

▼王新新著『再啓蒙から文化批評へ』大江健三郎の一九五七〜一九六七』(A5判、二六一頁、三一五〇円(税込)) 大江健三郎は、戦後日本の文化危機、社会危機を打破し、新生を呼びかけた啓蒙者であり批評家でもある。本書は、初期大江文学の問題意識とその根底にあるもの―再啓蒙意識、自己啓蒙意識および文化批評意識―を基に、中国人文学者の観点から、大江文学の解読を試みたもので、若手研究者助成出版書の一冊である。大江文学の考察を通じて、「文以載道」の伝統をもつ中国文学に示唆を与えることが、本書のより大きな目的である。

## 流通経済大学出版会

「小規模大学出版会の収支雑感」  
お客様が当小会発行の書籍を手にとつて見てくれる。喜びもつかの間、棚へと戻される。何度かこのようなシーンを見た。結局は売上がたたなかった。もちろん他の出版会では、濃淡はあるものの、売上を計上していた。

昨年の東京国際ブックフェア初日のことである。これが出版会との関わりの一ページとなった。確かに、限られた棚数のなかでは出展数も制限されるが、新刊本発行件数が少ないのはつらい。岩波書店には百名の編集者がいる。一人当たり平均発行点数六・八冊という。

当小会では、商売ベースとしての点数は年四冊、さらに、非売品として、各部の紀要等を発行している。一人で扱える発刊点数には限度がある。人件費を計上して採算ベースに持つてゆくにはまだまだ多くの時間が必要となる。

業務の分担も編集・営業・情報と多岐にわたる。これから出版会を立ち上げる大学も多いと聞く。当面は販売ルートの確立が勝敗を分けることになる。小会の販売は取次店様に負うところが大きい。

## 聖学院大学出版会

▼松谷好明著『イングラント・ピューリタニズム研究』（A5判上製、四三三頁 八四〇〇円、二〇〇七年三月二〇日刊行）  
「ピューリタン」という言葉には、揶揄的な「潔癖すぎる人」という意味があるように、日本のみならずアメリカにおいてもその思想は正當に評価されてこなかった。著者は、ピューリタンたちの歴史の資料を丹念に読み、通俗的なピューリタン理解を排し、現代におけるピューリタニズムの思想的意味を明らかにする。しかも著者はピューリタニズムの信仰基準や教会政治論を固定的な自明の概念とすることなく、「歴史的な概念」として捉え、多様性を重んずる。そこには著者の現代の危機的な状況に対するピューリタニズムの意義を明らかにしたいという問題意識が鮮明にあるからである。それゆえ、イギリスに起源を持つピューリタニズムの影響史をアジアまで辿るのである。著者は、博士學位論文を中心に、最新のピューリタニズム研究の成果を踏まえながら本書を書き下ろしているが、ここで類書にない独自のピューリタニズム理解を打ち出しているのである。

## 聖徳大学出版会

▼近刊  
「心と身体の癒しシリーズ」の第三巻「こころとスポーツ」（永島正紀著）は刊行が予定より遅れているが、現在執筆進行中である。

▼新譜  
『親子で楽しむ唱歌集』（CD 二〇〇七年四月一日発売 三四〇〇円税込 二枚組 全四二曲 歌唱Jソロイスト・女声アンサンブル）  
このCDは、教科書から消えてしまった小学唱歌や、歌い継がれ後世にも伝え残したい歌を系統的に網羅し、教育資料としてだけではなく、教育関係、音楽界にも広く活用されることを目指し収録されたものである。

おなじみの「故郷」「花」「こいのぼり」など、子どもの頃から一度は口ずさんだことのある唱歌が、美しい女声アンサンブルのハーモニーのもとつかしく蘇ってくる。

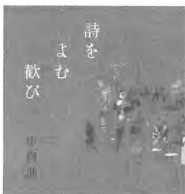
全四二曲は合唱とピアノ演奏のみの二パターンから構成されており、演奏に合わせて歌うこともできるようになっている。

## 麗澤大学出版会

▼中西進著『詩をよむ歓び』（一六八〇円）  
伊良子清白から谷川俊太郎まで、近・現代の日本を代表する詩人八十人の八十篇の詩を精選し、それぞれに珠玉の解説を付した21世紀のベストアンソロジー。「読者の皆さんが日々口ずさみ、心に深く刻みつけ、命を共にして頂くに足るものしか、選んでいません。」——著者。

▼大場裕之・大場ゼミナル著『学問力のすすめ——活きた学問を楽しむために』（一八九〇円）共に考え・問うことを実践してきた大学のゼミでの成果をもとにした新しい方法論を展開する。

▼S・ヒルスタッド他著／目黒昭一郎訳『ヘルスケア・マーケティング——戦略の策定から実行まで』（五〇四〇円）「顧客志向」のマーケティングと「戦略的マネジメント」の発想を生み出す医療関係者必読の書。



『詩をよむ歓び』

## 慶應義塾大学出版会

▼慶應義塾大学経済学部英語部会編著『Study Skills for College English』（二〇五〇円）大学の勉強に必要なアカデミック・イングリッシュの三つの基本的技能「Writing Reading Presentation」を集中的に訓練する必携テキスト。

▼細田衛士著『環境制約と経済の再生産』（二九九〇円）環境経済学の第一人者による最先端の理論書。緻密な論理展開で生産過程における残余・廃棄物を明示的に取り込んだ経済モデルを構築、持続可能な経済システムのあり方を提示する。

▼原宏之著『言語態分析』（二二二六〇円）テレビやインターネット等の普及により、コミュニケーションを促進するメディアとして、映像や音声が貴重な記録資料となりつつある。マルチモーダルな情報社会のメディア「言語」を分析するための「言語態分析」の方法を提唱する。

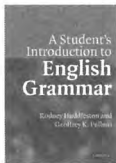
▼安西敏三著『福澤諭吉と自由主義——個人・自治・国体』（四二〇〇円）福澤諭吉は、トクヴィル、ミルら自由主義者の思想から何を学び、自らの糧としたのか。同時代の日本への提言を倦むことなく続けたその思考の軌跡を、精細に描き出す。

## ケンブリッジ大学出版局

▼ケンブリッジ現代英語文法入門（翻訳版）（ISBN 9784902290196、税込二九四〇円）

ケンブリッジ大学出版局が出版する初の和書の学術書。英語文法の定番テキストである『A Student's Introduction to English Grammar』（左記）をより多くの日本の学生に「利用いただけるよう」、日本語翻訳いたしました。初心者でも使いやすい構成で、練習問題も多数収録されています。

▼『A Student's Introduction to English Grammar』（原書）（ISBN 9780521612883、USD 29.99）二〇〇五年に出版された、『ケンブリッジ現代英語文法入門』の原書。大学生向けの現代標準英語文法入門のテキストで、二〇〇六年のベストセラーです。



## 産業能率大学出版部

▼産業能率大学総合研究所業務革新研究プロジェクト編著『確実に成果を生み出す業務革新 理論と実践』（二二二五円）「業務革新」とは、経営環境との関わりにおいて、ステークホルダー（利害関係者）との維持・改善・発展に向けて、組織のマネジメントに関する諸活動を革新していくことです。

本書は、現実の活動を改善していくのではなく、組織の目的や役割から組織の機能と業務を明確にして、外部環境や組織目的に適合した業務革新活動テーマやプロセスを設計する方法論について解説しています。

▼井出眞弘著『EXCELによる経済分析入門』（三二五〇円）

本書は、ビジネス社会で即役立つ実践的な分析事例を多く取り入れ、理論と実証の橋渡しである分析用ワークシートの作成方法や分析結果（数値）の解釈を、わかりやすく、丁寧に説明しています。Excelが初めての読者も基本から学ぶことが可能です。パソコンを用いて、実際に事例を確かめながら学ぶことをお勧めします。

## 専修大学出版局

▼吉家清次著『大学教育と「産業化」』(二一〇〇円)

高度知識情報化に向かう産業社会に対して、大学は如何に有効に 대응できるのか。比較経済システム論の専門家が、制度・組織のイノベーションを提言する。

▼趙恵淑著『樋口一葉作品研究』(二七三〇円)

「やみ夜」以降の後期作品論を試みながら、伝統と近代の狭間で揺れる人物像、人間関係、疎外感や狂気などを精密に分析した好著である。

▼井上美鈴著『低出生体重児の母親に関する臨床心理学的研究』(二七八〇円)  
母親の不安心理を因子項目別や、時間変化を軸に考察。現在の医療における取り扱われ方、心理臨床家の支援という視点と対応を提示する。

▼専修大学今村法律研究室編『今村懲戒事件(一)』(五〇四〇円)

疑獄事件の公判で裁判長を忌避したことから発した本事件、問題の経緯、公判調書、弁護権蹂躞問題記録、弁護人の在廷義務に関する調査書、書類類など。

## 大正大学出版会

▼藤原聖子監修、松田優・寺坂有美編著『女性自身』が伝えたアメリカの戦争』(B5判・二九四〇円) ベトナム戦争終結から三〇年が経った。その間アメリカは湾岸戦争、イラク戦争と戦争を重ねてきた。戦争に関する報道は各種メディアを通してなされてきたが、女性を主な読者対象とする週刊誌『女性自身』では、これら(アメリカの戦争)に関して、どのように報道し伝えてきたのか。また読者はどのような情報を欲したのか。

本書は、一九六五年から二〇〇五年の間に『女性自身』に掲載された一四四点の記事を網羅的に収録し、若干の解説を付している。ベトナム、湾岸、イラクそれぞれの戦争の報道姿勢の変化や読者の意識の変化などを読み解く最良の資料といえる。また、メディア論・現代史・女性学などの分野でも参考資料となる。

▼松濤誠達著『古代インドの宗教とシンボリズム』(A5判・二二五〇円)

▼近刊『社会福祉原論I』(A5判・一八九〇円) 社会福祉学の基本的視点・理論・方法・展開等を平易に解説する。

## 玉川大学出版部

▼『大学生のための「読む・書く・プレゼン・デイベート」の方法』松本茂・河野哲也著(A5判・一四七〇円) 学生生活、社会人生活を知的に送るために必要な四つの基礎力の本質を正攻法で伝授。テクニックはではなく、情報の収集・整理のしかたから主張・議論のしかたまでを、内容・形式両面から実践的に身につける。

▼『授業評価活用ハンドブック』山地弘起編著(A5版・三五七〇円) 授業改善のためのフィードバック情報として、教育効果を示すアカウンタビリティのツールとして使われる授業評価。その歴史と機能、評価を授業に生かす方法など、授業評価のすべてを知るのに最適。

▼『キーワードで学ぶ知の連環―リベラルアーツ入門』玉川大学リベラルアーツ学部編(A5判・二二〇〇円) 混沌とする知の世界の入口に立つ読者を対象に、学問で必須の基礎用語を解説。関連する項目をリンクさせ、総合的に理解する。

▼『観光ビジネスの戦略―ハワイ旅行を企画する』折戸晴雄著(A5判・二二〇〇円) ジャルパックで数々の大ヒット商品を生んだ著者が説く観光経営論。

## 中央大学出版部

- ▼一井昭・鳥居伸好編著『現代日本資本主義』(四二〇〇円)戦後世界秩序との関連で、九〇年代日本経済の重要課題を究明する。中央大学経済研究所研究叢書42。
- ▼田中廣滋・田中嘉成・薮田雅弘編著『21世紀の環境と経済』(三三六〇円)環境問題の第一線で活躍する論者が環境と経済の問題を多角的に分析し政策を提言する。中央大学経済学部創立百周年記念「寄付講座シリーズII」。
- ▼鈴木敏文・林昇一監修／中央大学総合政策研究科経営グループ編『経営革新Vol.3』(二五二〇円)大手企業の経営者が語る経営の神髄。経営革新の実践的研究、実践の書。
- ▼萩原金美編著『スウェーデン法律用語辞典』(四五・一五円)内容豊富で法史的記述も加味。社会福祉の正しい把握に必要な基本用語も掲載。スウェーデン以外の国で刊行される初の総合辞典。
- ▼田中努編『日本論…グローバル化する日本』(四〇九五円)グローバル化する日本をテーマに、政策・文化両面から日本が直面する重要な課題に迫る。中央大学政策文化総合研究所研究叢書5。

## 東京大学出版会

- ▼シリーズ「法の再構築」(全3巻)  
21世紀の現在、社会・経済・国際関係は変化の大きなうねりのなかにある。シリーズ「法の再構築」は、この変動を見据え新しい法システム構築を掲げて取り組んだ、五年におよぶ研究プロジェクトの集大成である。
- 第1巻『国家と社会』(江頭・碓井編、五四六〇円、三月刊)は、市場重視傾向など政府の役割の縮減、家族・会社など社会の機能の弱体化を踏まえ、国家と社会の新たな関係に根差した法のあり方を模索する。
- 第2巻『国際化と法』(塩川・中谷編、五六七〇円、四月刊)は、グローバル化が惹き起こすヒト・モノ・カネ・情報などの流動化に焦点を当て、「境界」についての原理的考察を踏まえつつ、その移動と意味変容の諸相を多角的に解き明かす。
- 第3巻『科学技術の発展と法』(城山・西川編、五四六〇円、五月刊)は、従来からの伝統的法システムを根底から揺るがせる「科学技術」に焦点を当て、科学技術の急速な進歩に対応して求められる新たな法概念を浮き彫りにする。

## 東京電機大学出版局

- ▼『シリアスゲーム』(藤本徹著／一九九五円)「デジタルゲーム技術を社会の諸領域の問題解決に活用する」というシリアスゲームのコンセプトは、教育やコミュニケーションに関わる政策・経営課題を抱える様々な分野から関心を集め、ゲーム産業からスピリアウトした新たな産業領域を形成しようとしている。
- 本書ではシリアスゲームのコンセプトや開発・導入に必要な考え方について事例を交えながら解説。日本においてシリアスゲームに期待される役割や可能性について論じている。
- ▼『社会安全システム』(中野潔編著／三五七〇円)安全とは、国家の役割とは、という基本的疑問に始まり、情報通信技術、都市工学、法学、制度など多面的視点から社会安全システムの現状と動向を、実証実験を交えて浮き彫りにした。
- 第I部では安全学総論と都市工学的側面から、第II部では法と制度の側面および社会安全システムの実例概観から、第III部では情報通信技術、社会安全システムの実例詳解、および情報伝達の側面から、それぞれ論考を進めている。

## 東京農業大学出版会

▼水と地域と農の連携 駒村正治編著

二一世紀は「環境の世紀」とも「水の世紀」ともいわれている。わが国は降水量が世界平均の二倍近くもあり水に恵まれた環境にあるが、水と地域と農の連携を専門分野の視点で論究したものである。

平成一九年一月/A5判

一七二頁/税込価格一九九五円

▼ランド・スケープアーキテクト100の仕事 I.S.A展編集委員会編

造園科学科卒業生たちの活躍を人と作品にスポットをあてた「ランドスケープアーキテクト」展を東京農業大学「食と農」の博物館で開催した内容をまとめたもの。多才な人材の魅力に触れることができる。

平成一九年一月/A5判

一一〇頁/税込価格一六八〇円

▼島から大陸をめざして―農業拓殖の回想― 村松義夫著

日米交流の橋渡し役。アメリカに居をかまえて日本からの農業視察研修の人たちのリードオフマンとして手腕を発揮。

平成一九年三月/四六判

二六七頁/税込価格二一〇〇円

## 法政大学出版局

▼「中国の紙と印刷の文化史」

銭存訓著/鄭如斯編/久米康生訳

本書は、ジョゼフ・ニーダム編著《中国の科学と文明》シリーズの一冊として刊行され、高い評価を得た英語版をさらに改訂・増補した中国語版からの翻訳です。原始期から唐代初期までの書籍発展史を論じた前著『中国古代書籍史』（津木章・他訳/小局刊）の続篇として、本書は十九世紀末における手工業的印刷の終期に至るまでの歴史を追及します。紀元前後に世界で初めて紙を作り、グーテンベルクの四百年余も前に活字印刷を開始していたなど、中国の紙と印刷に関わる知られざる歴史、技術と工程、道具や芸術性を詳述した本書は、出版・印刷関係者に必読の文献として、長く読み継がれることを確信しています。



A5判上製436頁  
定価6,300円

## 武蔵野大学出版会

▼「いのちは誰のものか―仏教思想に人間を問う―」 山崎龍明編著、共著者・西本照真、高橋審也、本多静芳（B6判・一八九〇円、二〇〇七年四月刊行予定）

NHK教育テレビ「こころの時代」宗教・人生」に一年間出演し、親鸞の思想を中心にわかりやすい語り口で説き好評を博した編著者が中心となりまとめた初学者にもわかりやすい仏教入門書である。「ゴータマ・ブッダに教育を学ぶ」「仏教にいのちを学ぶ」「親鸞の生涯と思想に人間を学ぶ」の三章から成る。



▼「環境デザインの試行」（B5判変形、三九九〇円、二〇〇七年四月刊行予定）。



## 武蔵野美術大学出版局

▼酒井道夫・沢良子編『タウトが撮ったニッポン』A5判変型、一六〇頁、一八九〇円

昭和八年、ナチに追われたブルーノ・タウトは恋人エリカ・ヴィッティヒと来日。アメリカへの足がかりのつもりで立ち寄った日本で、ふたりは三年半の日々を余儀なくされた。その間、タウトが建築家として腕をふるい実現したのは二物件。しかし、その著作により彼は「日本美の発見者」として今日までその名をとどめている。

近年の学術調査により、タウトの遺品から四冊の写真アルバムが発掘された。そこには昭和八年から十一年にかけてタウトが撮影したピントのあまい写真やら、絵はがきなど二四二点。報道カメラマンよろしく、好奇心のままに小さなカメラ「ヴェス単」で果敢に被写体に挑むタウト—おんぶ姿、渋谷のハチ公、桂離宮、ちんどん屋、崩れそうなスラム、下駄ばきで紙芝居に群がる子供たち—匂い立つような昭和初期の暮らしぶりへのタウトの眼差しを再検証すべく、アルバムから厳選した二三〇点を新訳の日記とともに紹介。タウト写真アルバムの初めての書籍化！

## 明星大学出版部

▼教育行財政概説

—現代公教育制度の構造と課題—  
樋口修資編著

A5判四二〇頁・定価二八三五円

学校教育をめぐる状況は大きく変容し、直面する課題は複雑化している。いま学校教育に求められているものは何か。公教育制度の成り立ちと基本的仕組み、その構造と機能を解説し、豊富な事例・情報を紹介しながら、教育行財政の今日的な在り方を提示する。執筆は編著者を中心に教育行政の第一線で活躍する専門家による。学校の管理・運営のための有用なハンドブックである。

教職課程のテキスト新刊から

▼初等教育原理

明星大学初等教育研究会編

A5判三五〇頁・定価二五二〇円

▼教育方法の理論と実践

小川哲生・菱山覚一郎著

A5判一六〇頁・定価一五七五円

▼人間性と人間形成の教育学

青木秀雄著

A5判三七〇頁・定価二六二五円

## 早稲田大学出版部

▼『ボスト代表制の比較政治—熟議と参加のデモクラシー』（小川有美編、三一五〇円）有権者の意思は政治にうまく反映しているのか。平等な参加者が議論を尽くす「熟議」デモクラシーの可能性を問う。比較政治叢書第3巻

▼『環境が農を鍛える—なぜ農業環境政策か』（原剛、三七八〇円）生産効率を優先した農業は終わった。有機無農薬農業の実践を紹介し、環境と共存する農業を追求。アジア太平洋研究選書第5巻

▼『新版 早稲田ラグビー史の研究—全記録の復元と考察』（日比野弘、一五七五〇円）大好評を得た前著（一九九七年初版発行）に、その後九年間の早稲田ラグビーの活躍ぶりを増補。清宮克幸監督時代を初め、見事に復活した早稲田ラグビーの足跡を鮮やかに記録する。



## 東海大学出版会

▲日本土壤動物学会編『土壤動物学への招待―採集からデータ解析まで』(B5判、三三六〇円) 足元の土の動物研究の決定版―採集法・標本作製・写真撮影から分類など土壤動物の最新情報。

土壤動物の分類、生態、応用研究の進歩を総括するとともに、多様な土壤動物の採集・固定法、分類の手引き、多様な環境を対象とした野外調査法、個体群・群集解析法、環境指標・アセスメントなど土壤動物を調べるために必要な手法をわかりやすく解説する。中学・高校生など、これから土壤動物学を始める人や、中学・高校の理科の教師、環境アセスメント関連の人たちにとって必携の図書。日本土壤動物学会創設三十周年記念出版。

▲金子信博著『土壤生態学入門―土壤動物の多様性と機能』(A5判、二九四〇円) 土壤に生息するミミズ、ダニ、多足類などの土壤動物を通して、生物多様性、生態、生活史、環境指標、機能までを解説する土壤動物学テキスト。

## 名古屋大学出版会

▼岡田裕成／齋藤晃著『南米キリスト教美術とコロニアリズム』(六九三〇円)

植民地的状況に根ざした特異な美術のありようを、現地調査に基づく新資料と多数の貴重な図版によって展望。

▼ジェラルド・グローマー著『誓女と誓女唄の研究』(三一五〇〇円) 二〇年にわたる徹底的な史資料の調査によって実現した初の本格的総合研究。誓女の社会的あり方と芸能活動を多角的に描く。

▼池上俊一著『ヨーロッパ中世の宗教運動』(七九八〇円) ヨーロッパ中世社会が希求した(霊性)のあり方を民衆的な宗教運動に探り、その持続と変化の様を通して中世世界をトータルに捉え直す。

▼安藤隆徳著『フランス自由主義の成立―公共圏の思想史―』(五九八五円) 公共圏の樹立を課題とした政治思想としてフランス自由主義を根底から捉え直し、その発展を鮮やかに描き出した労作。

▼眞壁 仁著『徳川後期の学問と政治―昌平坂学問所儒者と幕末外交変容―』(六九三〇円) 忘却された儒家、古賀家三代の知的・政治的所産を解明。近代外交黎明期の姿を描き出した画期的成果。

## 三重大学出版会

▼法則ブラザ編著『法則探検に出かけよう』(四六判二二二頁(本体一八〇〇円+税))。社会生活の中の、見のがしがちな習性や性情を発見し説明し、応用しつつ検証する手順を説く。日本社会版「マン・ウォッチング」の勧め。随所にユニークな知見が披露される。著者のオーバードビューを核として、地理学、歴史学、文学、自然科学、経済学、言語学、心理学、看護学、地域経済学、人類学、科学史の各分野から選ばれた著者が法則的アプローチを試みる。第一章、発見の方法／第二章、空間法則の発見／第三章、歴史的事実の発見／第四章、文学における意味世界の発見／第五章、説明・解釈の方法／第六章、自然科学の説明／第七章、経済学的説明／第八章、言語理論による説明／第九章、心理学的説明／第十章、応用の方法／第十一章、看護への応用／第十二章、まちづくりにおける法則発見と応用／第十三章、批判の方法／第十四章、日常生活を疑う法則／第十五章、科学史から見た法則／新入生向けの学術入門書として編集された。

▼日本修士論文賞・審査中



## 京都大学学術出版会

▼『感情科学の展望』藤田和生編(三五〇頁・三五七〇円)(予価) 喜怒哀楽に正義感、嫉妬、不公平感——、これらの行動を大きく動かす「感情」は理性的行動に比べて未解明である。その感情について基礎的機能や神経科学的基盤、発生過程、病理など多角的視点から研究を集成し、「感情科学 affective science」という新分野を切り開く。

▼『創薬論——プロセスと薬事制度』村川武雄著(三六〇頁・三三六〇円) 医薬品候補のシークエンスから治験、製成品化、販売後調査まで、30余年に涉つて医薬品の国際開発業務に携わつた著者が、安全性・有効性を確保する開発プロセスと日・米・EUの全制度を詳細に解説。薬学・製薬関係者必携の一冊。

▼『学術選書』シリア派イスラーム——神話と歴史』嶋本隆光著(二四三頁・八九〇円) イスラーム世界で強大な勢力をなすシリア派に関するわが国最初の本格案内書。シリア派の思想信条の礎とは何か? 歴代の指導者イマーム像を手がかりに、現今の中東イスラーム世界を取り巻く思想的状況を解き明かす。

## 大阪経済法科大学出版部

▼『債権総論 改訂版』西山井依子著(A5判・三三〇頁・定価 二二〇〇円) 資本主義社会では、私有財産制と自由競争を2つの軸として、社会の運営がなされています。その2つの軸の法的原理は、所有権の絶対性および自由と、それを軸として人と人が協力して社会関係を展開する契約の自由です。

債権は、この人と人との協力関係の法的絆として、人が相手方に行為を請求して相手方がその行為をなすという関係にあることを、国家が法的に支援するために法的制度です。この協力関係は私たちの生活のすみずみに至っており、私たちはおびただしい債権の法鎖のなかに包まれて日々の生活を行っています。したがって、債権法を理解することは、すべての法律的問題を理解する上での基本的条件といつても過言ではないでしょう。

本書は、主に大学で債権法の講義を受ける学生みなさんのために、理解してもらいたい基本的な体系的知識や概念を、二〇〇四年の民法の現代語化や、旧版以降の判例の動向をふまえ、できるだけ明確に、より具体的に説述した改訂版です。

## 大阪大学出版会

▼新・教養書シリーズ『阪大リーブル』創刊(四六判・並製)。第一回配本三冊。

▼伊東信宏編『ピアノはいつピアノになつたか?』(二一八〇頁 一七八五円) 約三〇〇年前に誕生したピアノが現在の形に至るまでの変遷を、バッハ、ベートーヴェン、ショパン、リストなどの作品や演奏法への影響との関連から解説。ピアノ愛好家、音楽史研究者、ピアニスト必読の書。付録CD「歴史的ピアノの音」。

▼荒木浩著『日本文学 二重の顔 へ成るVことの詩学へ』(三五〇頁 二一〇〇円) 宝誌和尚像の顔の表皮がめくれてもうひとつの顔がのぞく:二重、三重に多層化・多面化する古典文学や芸能のテクストの深みに分け入り、日本文学の新たな相貌、面白さ、奥深さを味わう。

▼藤田綾子著『超高齢社会は高齢者が支える 年齢差別を超えて創造的若いへ』(二〇〇頁 二六八〇円) 高齢者を弱者として位置づける見方がもたらした年齢差別を乗り越え、高齢者が市民として誇りを持って生きる道を探る。深刻な問題に光を当て、新たな関係性の構築やボランティア活動にその活路を見出す。

## 関西大学出版部

- ▼森瀬壽三著『唐詩新攷 補篇』(A5判・二三一〇円)好評の論文集『唐詩新攷』の続篇。唐詩人達の作品で解明の進んでいなかった詩篇「感遇」や杜甫と絵画の關係についてなど、論文やエッセー等により、文学と絵画の意外な關係を考察。
- ▼芝田豊彦著『ドイツにおける神秘的・敬虔的思想の諸相―神学的・言語的考察―』(A5判・三二五五円)ドイツ神秘主義も含めながら、ドイツ敬虔主義に重点を置き、ゾイゼからルターを経てヘルダーリンへ至る諸思想について、神学的・言語的解明を目指した。
- ▼柴健次編著『会計教育方法論』(A5判・二九四〇円)考える学習への教育方法論が注目されるなか、会計人を養成する会計大学院は、新しい教育の実験の場である。本書は関西大学会計大学院教員により著された、会計教育の実践書である。



『会計教育方法論』  
定価2940円

## 関西学院大学出版会

- 新刊
- ▼関西学院大学形成支援プログラム編『よき法曹を育てる』法科大学院の理念とシミュレーション教育(A5並製・三二二頁・定価二七三〇円)
- ▼平林 孝裕編著 関西学院大学共同研究愛の研究プロジェクト編『愛を考える キリスト教の視点から』キリスト教的愛を中心にした共同研究の成果(四六並製・二四〇頁・定価二一〇〇円)
- ▼関西学院大学COEプログラム『先端社会研究 第六号』特集▽調査倫理(A5並製・二八六頁・定価二九四〇円)
- ▼磯貝 曉成著『関西学院初等部のめざすもの』見えなものの心を傾け、夢を育む学校(A5並製・一一二頁・定価八九三円)
- ▼NGUYEN THI NGOC MAI 著『THE MULTIDIMENSIONALITY OF ELECTRICITY INDUSTRY REFORM』ベトナムとアジアの電力産業の状況を分析(A5上製・三四〇頁・定価六三〇〇円)

## 九州大学出版会

- ▼『発達障害のための心理劇―想(おもい)から現(うつづ)に―』高原朗子編著(A5判・一八四頁・二七三〇円)発達障害児・者の問題行動解決のために心理劇の理論と治療技法を解説する。
- ▼『日本の生命倫理―回顧と展望―』高橋隆雄・浅井篤編(A5判・四〇四頁・三九九〇円)患者の権利、臓器移植、遺伝子診断:日本の生命倫理研究の総括を試みる論集。(熊本大学生命倫理論集1)
- ▼『ジャン・パウルの短編集II』恒吉法海他訳(A5判・五五〇頁・八九二五円)極めて緊迫した言語の背後に在るドイツの鋭い、辛辣な知性との対話。夢と機知の作家の翻訳完結編。
- ▼『スペンサー詩集』和田勇一他訳(A5判・五七六頁・七三五〇円)『羊飼の暦』、『アモレットイと祝婚歌』等、エリザベス朝詩人スペンサーの小品を網羅した日本語訳の決定版。英文学研究者必読の書。
- ▼『ロシア革命と保育の公共性―どの子にも無料の公的保育を―』村知稔三(A5判・三六八頁・七四〇円)革命前後(一九二〇年代)のロシアにおける保育制度構想の変遷を当時の資料に基づき分析。

## 有限責任中間法人 大学出版部協会賛助会員

---

【50音順】2007年3月31日現在

株式会社朝日新聞社	〒104-8011 東京都中央区築地5-3-2
垂細垂印刷株式会社	〒380-0804 長野県長野市大字三輪新屋1154
有限会社アベル社	〒162-0825 東京都新宿区神楽坂2-19 銀鈴会館408
尼崎印刷株式会社	〒661-0975 兵庫県尼崎市下坂部3-9-20
王子製紙株式会社	〒104-0061 東京都中央区銀座4-7-5
株式会社大森印刷	〒105-0003 東京都港区西新橋3-17-1
岡本出版発送株式会社	〒353-0001 埼玉県志木市上宗岡3-16-2
株式会社協栄アドインフォ	〒101-0054 東京都千代田区神田錦町1-14 立花日英ビル2F
株式会社クイックス東京	〒170-0013 東京都豊島区東池袋4-27-14 山京システムビル4F
港北出版印刷株式会社	〒150-0002 東京都渋谷区渋谷2-7-7
三美印刷株式会社	〒116-0013 東京都荒川区西日暮里5-9-8
三立工芸株式会社	〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-4
三和印刷株式会社	〒381-2226 長野県長野市川中島町今井字薬師寺1822-1
信濃印刷株式会社	〒102-0072 東京都千代田区飯田橋4-1-11
城島印刷有限会社	〒810-0012 福岡県福岡市中央区白金2-9-6
新日本印刷株式会社	〒162-0845 東京都新宿区市谷本村町3-29
株式会社鈴木製本所	〒112-0014 東京都文京区関口1-17-5
大同印刷株式会社	〒849-0902 佐賀県佐賀市久保泉町上和泉1848-20
ダイニック株式会社	〒105-0012 東京都港区芝大門1-3-4 ダイニックビル7F
株式会社太洋社	〒501-0431 岐阜県本巣郡北方町北方148-1
土山印刷株式会社	〒601-8305 京都府京都市南区吉祥院宮ノ東町7
宗教法人天然寺	〒204-0021 東京都清瀬市元町1-4-5-711
東一紙業株式会社	〒101-0047 東京都千代田区内神田1-12-7
株式会社東京弘報社	〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-34
株式会社とうこう・あい	〒104-0061 東京都中央区銀座8-11-11
株式会社日本経済新聞社	〒100-8066 東京都千代田区大手町1-9-5
株式会社博報堂	〒108-0023 東京都港区芝浦3-4-1 グランパークビル17F
株式会社平文社	〒170-0005 東京都豊島区大塚2-35-7
株式会社堀内印刷所	〒112-0013 東京都文京区音羽1-21-11
株式会社毎日新聞社	〒100-8051 東京都千代田区一ツ橋1-1-1
株式会社遊文舎	〒532-0012 大阪府淀川区木川東4-17-31
株式会社読売新聞東京本社	〒100-8055 東京都千代田区大手町1-7-1

---

有限責任中間法人大学出版部協会は、私たちの活動をご理解・ご支援下さる皆様による「賛助会員」制度を発足いたしました。ここに趣旨にご賛同・お申し込みを頂きました各社様をご紹介させていただきます。なお「賛助会員」に関するお問い合わせは協会事務局までお寄せ下さい。

# 有限責任中間法人大学出版部協会 加盟出版部一覽

## 北海道大学出版会

060-0809 札幌市北区北9条西8丁目 北海道大学構内  
TEL 011-747-2308 FAX 011-736-8605

## 東北大学出版会

980-8577 仙台市青葉区片平 2-1-1 東北大学構内  
TEL 022-214-2777 FAX 022-214-2778

## 流通経済大学出版会

301-8555 龍ヶ崎 120  
TEL 0297-64-0001 FAX 0297-64-0011

## 聖学院大学出版会

362-8585 上尾市戸崎 1-1  
TEL 048-725-9801 FAX 048-725-0324

## 聖徳大学出版会

271-8555 松戸市岩瀬 550  
TEL 047-365-1111 FAX 047-363-1401

## 麗澤大学出版会

277-8686 柏市光ヶ丘 2-1-1  
TEL 04-7173-3331 FAX 04-7173-3154

## 慶應義塾大学出版会

108-8346 港区三田 2-19-30  
TEL 03-3451-6926 FAX 03-3451-3124

## ケンブリッジ大学出版局

101-0054 千代田区神田錦町 1-10-1 サクラビル1階  
TEL Academic 03-3291-4068 / ELT 03-3295-5875 FAX 03-3219-7182

## 産業能率大学出版部

100-0005 千代田区丸の内1-7-12 サピアタワー9階  
TEL 03-6266-2400 FAX 03-3211-1400

## 専修大学出版局

101-0051 千代田区神田神保町 3-8 専修大学5号館6階  
TEL 03-3263-4230 FAX 03-3263-4288

## 大正大学出版会

170-8470 豊島区西巢鴨 3-20-1  
TEL 03-5394-3026 FAX 03-5394-3038

## 玉川大学出版部

194-8610 町田市玉川学園 6-1-1  
TEL 042-739-8935 FAX 042-739-8940

## 中央大学出版部

192-0393 八王子市東中野 742-1  
TEL 0426-74-2351 FAX 0426-74-2354

## 東京大学出版会

113-8654 文京区本郷 7-3-1 東京大学構内  
TEL 03-3811-8814 FAX 03-3812-6958

## 東京電機大学出版局

101-8457 千代田区神田錦町 2-2  
TEL 03-5280-3433 FAX 03-5280-3563

## 東京農業大学出版会

156-8502 世田谷区桜丘 1-1-1  
TEL 03-5477-2562 FAX 03-5477-2643

## 法政大学出版局

102-0073 千代田区九段北 3-2-7  
TEL 03-5214-5540 FAX 03-5214-5542

## 武蔵野大学出版会

202-8585 西東京市新町 1-1-20 武蔵野大学構内  
TEL 042-468-3003 FAX 042-468-3004

## 武蔵野美術大学出版局

180-8566 武蔵野市吉祥寺東町 3-3-7  
TEL 0422-23-0810 FAX 0422-22-8309

## 明星大学出版部

191-8506 日野市程久保 2-1-1  
TEL 042-591-9979 FAX 042-593-0192

## 早稲田大学出版部

169-0071 新宿区戸塚町 1-104-25  
TEL 03-3203-1551 FAX 03-3207-0406

## 東海大学出版会

257-0003 秦野市南矢名 3-10-35 東海大学同窓会館内  
TEL 0463-79-3921 FAX 0463-69-5087

## 名古屋大学出版会

464-0814 名古屋市千種区不老町 1 名古屋大学構内  
TEL 052-781-5027 FAX 052-781-0697

## 三重大学出版会

514-8507 津市上浜町 1515 三重大学出版ホール内  
TEL 059-232-1356 FAX 059-232-1356

## 京都大学学術出版会

606-8305 京都市左京区吉田河原町 15-9 京大館内  
TEL 075-761-6182 FAX 075-761-6190

## 大阪経済法科大学出版部

581-8511 八尾市楽音寺 6-10  
TEL 0729-41-8211 FAX 0729-41-9979

## 大阪大学出版会

565-0871 吹田市山田丘 1-1 大阪大学事務局内  
TEL 06-6877-1614 FAX 06-6877-1614

## 関西大学出版部

564-8680 吹田市山手町 3-3-35  
TEL 06-6368-1121 FAX 06-6389-5162

## 関西学院大学出版会

662-0891 西宮市上ヶ原1番町 1-155  
TEL 0798-53-5233 (内線81002) FAX 0798-53-9592

## 九州大学出版会

812-0053 福岡市東区箱崎 7-1-146 九州大学構内  
TEL 092-641-0515 FAX 092-641-0172